

アイヌ民族博物館 北海道白老町若草町2丁目3番4号

コタンメール

第1号 2002.7.1



「アタネ」ってなあに？

この不思議な名前の正体は、6月15日土曜日に、42名の参加で館内ポロチセで開かれた第二回文化教室であきらかになりました。解説者は博物館の特別学芸員本田優子講師で、答えは植物のカブでした。

「アタネ」は江戸時代から私たちアイヌがよく食べていたものとして知られていましたが、その種類や味などはよくわかっていませんでした。

昭和の初めごろから、日本の歴史学者、民族学者、植物学者などが古い文献をいろいろ調べて研究していますが、まだ正解は得られていません。

「アタネ」は今までセンダイカブとも呼ばれていて、赤色や紫がかかったもの、大きいのと小さいのがあります。

「あたね」は他のカブよりはるかに栄養のある植物で、繊維もビタミンCもたくさん含まれています。

アイヌは今まで肉や魚を常食としていたと思われていたが、山菜はもちろんですが、畑で植えた植物もたくさん食べていたと考えなければならないとのことでした。

私たちは、日本の北で生活していますが、先祖代々北海道で暮らしてきたアイヌが、一番北の暮らしを知っていたことは当たり前前のことです。

今私たちの暮らしをよりよいものにするためには、忘れてしまった昔の知恵を調べて、見なおす必要があります。

遠く札幌や鶴川町、登別町から来てくださった受講者の方々から、私も母親からカブの煮物を食べさせられたと、詳しい経験談が出されるなど、新しい情報も交換されて楽しく役に立つ教室になりました。

ポロトコタンでできることはなに？

皆さんがポロトと呼んでいる所は、正しくは、アイヌ民族博物館といいます。

毎日、国内外から、大勢のお客さんが見にくる野外博物館なのです。

何が見られるのか、一度も来られていない方に説明しましょう。

最初に目に飛び込むのは、澄んだ湖の岸辺に広がる昔のアイヌの村です。茅ぶき屋根の昔の家々です。

家からはいろいろの煙のにおいが、ほのかにただよって来ます。

アイヌ語でチセという家の中では、民族衣装を着た人の、アイヌの踊りや唄が見聞きできます。

ムックリ（小楽器の名前）の演奏や、アイヌ文化についてのお話も聞けます。

高床式の倉や、トイレもあります。

見終わったら、屋内博物館の展示も見ましょう。ここには、たくさんの資料を使って、アイヌの狩りの様子や毎日の生活を見ることができます。

また外に出ると、おりの中に大きなひぐまがいます。北海道犬（館長註：アイヌ犬というべきだと思っています。）というアイヌが昔から飼っていた犬もいます。

ひぐまは大切な食料で、犬はそのくまをとる時に人間の手助けをした大切な動物でした。

小さいけれども、植物園があり、食べるもの薬につかわれたもの、布を織るとき使われたものなどがわかります。

見ているうちに、わからないことがあったり、もっと知りたくなったら、博物館には学芸員がいて、いろいろな質問に答えたり、子どもさんの勉強の手助けをしたりします。ムックリの演奏のしかたもお教えます。

学校の総合的学習の時間に来ていただくと、いろいろな課題が見つかります。いつでもおいでください。お待ちしております。

お聞きになりたいことがありましたらいつでも下記までお電話ください。

アイヌ民族博物館 学芸課
電話0144-82-3914

■編集者の言葉



皆さん初めまして。5月に館長になったばかりの中村です。メールで博物館では、こんな働きをして白老町のお役に立っているということをお伝えします。博物館は町民の財産という考えで経営するつもりですが、皆さんのご活用がまた、私たちの財産ですので、今後いろいろお力添えくださいますようお願いいたします。次号で又お目にかかります。

中村 齋（なかむら いつき）

[コタンメール2号を読む→](#)